俘虜記

●天沼二丁目
須田　義一
（大正元年生まれ）

南支派遣肝兵団に属していた私等は、終戦後まず広東の北方約四〇キロ程の銀盞坳部落に集結した。蔣介石の正規軍が武装解除の任務を帯びて到着したのは、九月中旬ごろだった。広東からの列車が到着すると、若い将校に指揮された五〇名程の兵隊は、直ちに付近の地形を調べ防御陣地の構築にとりかかった。一体何のための陣地構築なのか。昨日までの敵だった日本軍は、未だ武器を持ったまま彼等の背後にいるのだ。しかし彼等は日本軍の規律を全く信頼し、少しの警戒心も持っていない。警戒すべきは昨日までの味方なのだ。武器が少数の中国正規軍に渡った時、この武器を奪うため、いつ襲撃して来るかわからないのだ。中国の複雑な悲しい運命が、ここにも姿を覗かせていた。

夕方、作業が一段落してから初めて、隊長は日本軍の所へやって来た。そして正式の軍使としての指令書を示し、その任務を説明した。若い隊長は開口一番「中国と日本が永年に亘り鉾を交えたことは、アジア最大の不幸だ。戦いの終わった今日、両国は互いに手をとり合ってアジアの興隆のため尽さなければならない。中国は今後日本から数々のことを学びたい。あなた方は祖国へ帰ったらこの気持ちを日本の人々に伝えてほしい」概略このようなことを筆談を交えて述べた。それは勝者の奢りを少しも感じさせない、立派な態度だった。

これは一青年将校の考えというより蔣介石総統の考え方を表したものだと感じ、戦争中、軍の上層部が中国に対しとってきた態度と比べ、この戦争は武力以前に道義において既に日本が敗れていたことをしみじみ感じさせられた。当時の青年将校が今若し健在なら、今日の日中関係をどのような感慨で眺めているだろうか。かくて武器を失なった我々は名実共に中国軍の俘虜となり、次の自分等の運命を待った。その間、中国軍の取扱いは思いのほか寛大というか親しみ深いもので、これがかつての敵とはとても思えないものだった。

九月末、我々は最後の集結地広東の俘虜収容所に到着し、爾後内地からの復員船を待ったのだが、市民の中から毎日俘虜をぶらぶらさせておくのはもったいないから労役に使えという声が出たらしく、各隊から市内の清掃隊を出すことに

なった。収容所にいる間は我々の身は安全だが、少数に分かれ一歩街に出れば市民からどんな危害を加えられるかわからない。事実、住民からの指摘で戦犯としてどこかへ連行され、二度と帰らなかった者も何人かいた。しかし私は自分から進んでこの労役につくことを希望した。武器を捨てた日本兵が中国人からどのような取扱いを受けるか。あるいは一命を失なうかもしれない。しかし若し無事で復員出来れば一生の中で恐らく二度と味わうことの出来ないこの体験は、今後の苦難を予想される人生の中できっと大きな支えとなり、役立つだろうと思ったのだ。以後半年余りの労役には筆舌に尽くし難い苦労があったが、限りある紙面なので省略し、我々の心を和ましてくれた出来事を述べてみたい。

我々は各警察に分かれて駐屯し、市中清掃の仕事に従事した。その間主食は中国軍から現物支給され、副食は街で買って自炊したのだが、広東市民の親切と寛容な態度は全く不思議な程だった。品物を売って貰えなかったり、高く売りつけられることは一度も無かった。むしろ三〇名余りの大口顧客の故でずい分値引もしてくれた。また、街の清掃作業の途中で荷車の中にそっと煙草などを投入してくれた台湾出身者がいたのには、心打たれるものがあった。ある時台湾の人達とこんな会話をしたことがあった。「我々は戦争に敗れたのだから仕方がないが、あなた方は今は中国人に戻ったのだからいいですね」と言うと「兵隊さんそれは違いますよ、あなた方はまだ幸せですよ、帰る祖国があっていつか日本から迎えの船が来るでしょう。しかし私等にはそれは望めません。もし故郷に帰りたければ、働いて自分等で船を買って帰るしか方法がないのです。広東にいる台湾人の中で何人それが出来るでしょう。多くの人はこの土地で肩身の狭い思いをしながらそれでも必死になって故郷に帰る日を夢見て働いているのです」と聞かされ、自分等の考えの浅さを恥じ、それからはなるべく台湾の人々に迷惑のかからないよう心掛けた。また、戦争中日本軍の従軍看護婦として働いていた台湾の若い娘さんたちが、我等日本兵にだけ聞えるような小さな声で「今度生まれてくる時は大和撫子に生まれて来ましょうね」と語るのを聞いた時は、思わず涙のこぼれる思いがした。

戦後になって戦争中の日本兵のことが語られる時、マスコミの非常に片寄った報道のため悪い面だけが強調され、現地の人との暖い心の交流や人情があまり伝わっていないのを残念に思う。もし第一線の日本兵に人間愛がなかったら、俘虜になった我々はもっと違った運命にさらされ、あるいは今日の私はなかったかもしれないとしみじみ思う。

悲惨な思い出

●成田東一丁目
大宮司　仁一
（明治四三年生まれ）

半世紀近くたった戦争末期のことながら、今でも眼前脳裏にはっきりと焼付いている。

私は、終戦前は中部満州（満鉄沿線）の新京とハルピンにともに三時間の中間の要衝地陶賴昭の小学校長であった。

ドイツ敗戦後、戦況は目に見えて不利となっていった。日本は、『日ソ不可侵条約』を締結しているからと甘く考えていたようだが、ソ連軍は、宣戦布告なしにソ満国境を越え、戦車を先頭に怒濤（どとう）のように侵入して来た。既に関東軍の精鋭は、Y第五部隊長とともに南方線戦に移動したため、関東軍百万磐石の備えと世界に誇った面影はどこへやらで、さらに我々在満一般民衆の、特に奥地の開拓団の人々の悲惨さは眼を覆う程であった。

さて、駅の方は、東満や北満から命からがら避難して来た人々の超満員の列車で、一一本ある線路が全部塞がってしまった。その中に、前任地の同僚や知人がいて、悲しい対面の連続で、慰問、激励と差入れの毎日を送っていた。

ダイヤのない列車は、いつ発車するか分からないので、年寄、子供、乳幼児を抱えた女世帯の人たちは、汽車から降りて町の家庭に救いを求めてきた。私も、二世帯の世話をした。もちろん、見ず知らずの人々である。こうして毎日が息苦しい生活であった。

予想はしていたが、全面降服の玉音を聞いて全く放心状態となってしまった。それからどうしたか覚えていない。気がついたら学校の職員室に一人茫然と立っていた。その夜は妻とこれからのことを考えて、まんじりともしないで一夜を明かした。

翌朝早く外に出て、町を見て驚いた。全戸一斉に青天白日旗がはためいていたのだ。この時から、敗戦国民として、天国から地獄へと一変してしまった。それから、治安のない町中、略奪、暴行が激しくなり、中国の治安維持会の指示で、日本人は一郭に軟禁された。

この一郭は日本人の所有地で、高い土塀に囲まれて中には高粱（コーリャン）畑もある広大な土地で、日本人も相当住んでいた。私もこの中に居住していた。町の中よりは安心の所だが、それで

も時計、万年筆などの貴金属類を奪われた。

そこで、急きょ在住日本人会をつくった。満鉄理事だった人（六一歳）を会長に、校長の私（三四歳）を副会長に、警察、役場、満鉄駅長と町の代表者を理事に、若手一九名を幹事として発足した。ところがその途端に、理事全員と幹事一五名が治安維持会に拉致され、留置されてしまった。出来たばかりの日本人会も壊滅状態となり、会長と私は途方にくれた。

しかし、ソ連軍の進駐は次第に増員されて、司令官も着任した。私は日本人の世話と進駐軍（司令官）の折衝に当たることになった。

最初のうちは、司令官の命で日本人、特に婦女子に乱暴するなとの布告が出た。

そこで、日本人会も門に看板を立てテントを張って、私と幹事たちが警備をしていた。

それから数日後、開拓団の人と思われる人が門前に来た途端バッタリと倒れた。着物はボロボロ、はだしで血がにじんでいた。極度の疲労と空腹で手当ての甲斐もなく、二時間後に不帰の客となった。家族とともに日本人のいる所までいこうと奥地から出発したが、途中ソ連兵などのため散り散りになり、一人で野を越え山を越えて、日本人のいる所まではとの一念で歩き続けた心の綱もプッツリ切れたらしい。お粥を出しても手にとる力もない。手当のほどこしようもない状態で哀れであった。

このように奥地の開拓団は、男手は召集され、婦女子と年寄りだけで逃避行の途中、幼児は、飢えと寒さ（夏も夜は急に寒くなる）のためバタバタと倒れていった。それで途中中国人に頼んで引取って（養父母）もらった子供たちが、残留孤児となって、現在肉親探しに来日しているのである。

当時の奥地の開拓団には、電気もラジオもないため、一、二か月後に敗戦を知って前記のような悲惨な状態を辿ったのである。

敗戦国日本に帰っても仕方がないと、県内日本人全員に青酸カリを渡した奥地もあった由。

話は前後するが、日本人会が壊滅状態になったことは前述した。その後、司令官からパーティーを開くのでウェイトレス三名の要求があったが二名だけでは不可と断わられた。

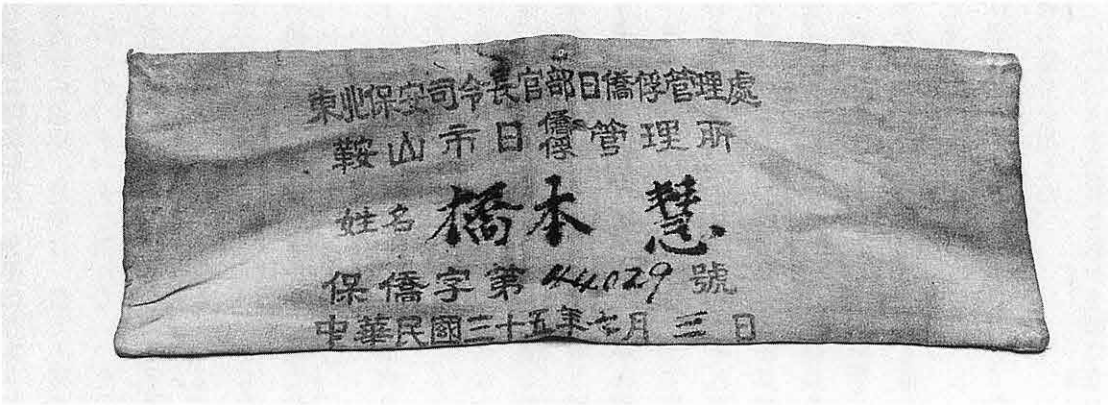
それ以後ソ連兵の態度が急変した。朝から酒に酔った兵隊が小銃（マンドリン）を向け「女（マダム）」といって家の中まで靴のまま入り込むようになった。日を追ってそれが激しくなったので、その対策に腐心した。門の見張人が兵隊が近づいた合図で老人、女子供を高粱畑に逃がし、連絡員を配置して確認後私が最後に逃げるのだ。そのため二度狙撃された。一度は、銃弾が右頬をかすめた。その傷は三週間も直らなかった。半歩遅れたらと思いゾッとした。

こんな毎日では命が縮まるばかりなので、ある夜ひそかに新京への避難の指令を出した。

翌朝、約二〇〇〇人を会長と私が先頭に立って駅に向かっ

て出発した。治安維持会の民兵が両側を警護してくれたが、空に空砲を撃つだけで何の護衛にもならなかった。数分間の距離で投石などのためけが人が出た。駅の中にいたソ連軍がこの光景を見て柵を越えてきて救助してくれた。地獄で仏に会った気持ちがした。

三時間のところ六時間もかかった難渋の新京避難のこと。毎日高粱粥で暮らした新京生活のことなど話題は数限りなくあるが、悲惨さが思い出されて胸が苦しくなったので擱筆する。



中国にいた時、俘虜管理所で使用していた腕章　〈提供　中川　慧さん〉

学徒出陣からシベリア抑留へ

●今川一丁目
寺尾　信一
（大正一二年生まれ）

戦争が激しくなると、学生も呑気に学校に通うことは出来なくなった。昭和一八年の秋、徴兵猶予は停止となり、いよいよ、戦場へ出て行くことになったのである。私は、豆満江（朝鮮民主主義人民共和国の北方）の畔（ほと）りにある会寧の連隊に入営した。そして、二年後の八月一五日、長い戦争は終わったのである。

私たちは、進攻してきたソ連軍により武装解除を受けたが、相手は、ドイツと死闘をくり返してきた連中だけに気が荒く、略奪、暴行など目に余るものがあった。

間もなく、下士官、兵は一〇〇〇名を単位とし、将校数名がつけられて作業大隊が編成された。

その他の将校は平壌に集められた。当時、私も下級将校の一人であったので、平壌郊外の旧陸軍廠舎に入れられ、暫くの間、無聊（ぶりょう）の日を送っていたが、まもなく日本海岸の港からソ連船に乗せられ出港した。ソ連側は、「ヤポンスキー、ダモイ、トウキョウ」（日本人は東京に帰るのだ）と言って私たちを喜ばせた。

ところが、翌日、甲板に出て見ると、船は一路、北上しているではないか！　その翌日ポシェットという港に入り、下船した。シベリアの土を初めて踏んだのである。秋も終わりに近く、冷たい風が吹いていた。帰国の夢は完全に絶たれたのである。

やがて、貨物車に乗せられ、シベリア鉄道を西へ西へと運ばれて行った。アムール河は凍結し始め、灰色の空からは粉雪が舞い降り、果てしなく拡がる大地は銀世界に変わろうとしていた。ウラル山脈を越えて暫くすると、キズネールという白樺の林に囲まれた駅がある。私たちはここで降ろされ、雪の中をエラブカまで遙かなる道程を歩かされたのである。

途中の村々には古い教会があり、夜はそこに泊まった。気温は零下三〇度、雲は空を覆い、雪は降りしきる。慣れぬ事とて凍傷に罹（かか）る人が続出した。三日目に、やっと、目的地エラブカに辿り着いたのである。この地には既に三年も前から、スターリングラードの戦いに敗れたドイツ将兵がいて、私たちを迎えてくれた。同じ境遇だからであろう。皆、親切であっ

た。

エラブカは、ボルガ河の大支流カマ河を少しさかのぼった岸辺にあり、由緒ある静かな町であった。美しい壁画の古い修道院が、今でも印象に残っているが、当時は倉庫の代わりにされていた。

ラーゲリ（収容所）は周囲に有刺鉄線を張りめぐらし、その外側には、高さ三メートル程の煉瓦塀がとり囲んでいる。塀の要所には監視塔が配置されて、監視兵が昼夜をわかたず、目を光らせていた。塀と有刺鉄線の間は、幅五メートル位のよく均らされた砂地で、もし、逃亡者があれば足跡が一目で分かるようにしてある。この砂地も固くなると柔らかく均らすのが私たちの仕事であった。帝政時代には幾多の流刑囚が、重い足枷を引きずって苦しんだのであろう。

起居の場所は、蚕棚のようになっていて狭く、時には横になり、刺身のようになって寝たものだ。夜、用便に起きて帰ってくると自分の寝場所がなくなってしまう事もよくあった。南京虫にも苦しめられた。

昼間は、森林伐採、原木運搬、荷役などに使われたものだ。夏は三時ごろに夜が明け始める。そして午後の九時過ぎまで明るい。冬はその反対に朝の九時過ぎまで薄暗く、夕方四時になると暗くなる。冬の間は、暖かい太陽の恵みによる機会は本当に少ない。何よりも寒さが厳しいのだ。昔はナポレオン軍を、近くはドイツ軍を敗退せしめた冬将軍が襲来してくると寒さは格別のものとなる。特にマローズと呼ばれる寒波におそわれると大気中の水蒸気はすべて凍り、防寒具に身を固めても、絶えず、耳、鼻、指などをこすっていないと凍傷になる。切られるような寒さなのだ。

こんな寒さの中でも、零下四〇度を下まわらぬ限り作業休止にはならなかった。

食事は、一日に黒パンが三五〇グラム、それにカーシャと呼ばれる燕麦のおかゆ、中味の少ないスープ、塩漬の魚、トマト、キャベツ、砂糖が少々といったひどいものであった。また、その分配が大変であった。誰もが空腹と闘っているから、少しでも不公平があると争いが起こった。「武士は食わねど高楊子」などとすましてはいられないのである。「衣食足りて礼節を知る」という諺も真理である。

学徒出陣の日から四年経った昭和二二年晩秋、私は幸いにも生命あって帰国することができた。

しかし、広大な彼の地には、今なお、飢えや寒さと闘い、毎日の重労働に耐え、望郷の想いを抱きながら倒れていった人々が、凍土の下に眠っている。心から御冥福をお祈りするとともに、一日も早い祖国帰還を祈って止まない次第である。

虜囚吟

亡き戦友(とも)に捧ぐ

一　米ソ相手の戦いに
国に利あらず敗れたり
吾北満で捕らわれぬ

二　ダモイの言葉に惑わされ
雨に打たれて貨車に寝て
秋風寒きソ連入り

三　吹雪と共に積もる雪
酷寒膚を貫くも
ノルマノルマで追われつつ

四　僅かな黒パン分けて食べ
野草を茹でて飢えしのぐ
枯れ木のような足と腕

五　倒す原木風に舞
戦友は仆(たお)れぬ其の下に
シベリア原野血に染めぬ

六　君の亡骸埋めたくも
黄昏暗く雪深し
ツンドラ固く墓浅し

七　望郷四年の抑留は
汗と涙と飢え寒さ
帰国待つ身の侘びしさよ

八　ナホトカ後に船の上
国破れても山河あり
迎える者は母ひとり

●久我山二丁目
増田　喬
（大正一〇年生まれ）

九　世相は代わり平成に
　シベリア近くなるという
　春を知らない土の下

十　原野に咲くはな彼岸花
　帰らぬ戦友に安かれと
　祈る心を伝えてよ

筆舌に表せない、あの戦争の悲惨さも、多くの国民から忘れられる時代となり、すでに風化しようとしています。

私自身でさえ、いつの間にか古希も過ぎ、年々記憶が薄れ、あのいまいましい抑留生活の苦悩も忘れ去り、懐かしさに変化しようとしています。時が過ぎれば痛みも薄れてゆくのは人の世の常というものでしょうか。

顧みれば苦労をともにし、一日千秋の思いで、故郷の土を踏む日を待ち望みながらシベリアの土となり帰還せぬ戦友のことを思えば、運命とは申せ残念でたまりません。

当時の事を偲びながら、拙い詩を作り亡き戦友に捧げる次第です。

無　題

熟年易惚学難成　　熟年惚易く学成り難し
一編記録不可軽　　一編の記録軽ずべからず
未覚異郷抑留夢　　未だ覚めず異郷抑留の夢

庭前落葉已秋声　　庭前の落葉已に秋声

漢詩の「少年易老」を、もじったものです。

再び戦争と捕虜体験を繰り返さぬよう祈りつつ……

死ぬ筈の　　ひよこが生きて　　彼岸花

（七一歳の誕生日を迎えて）